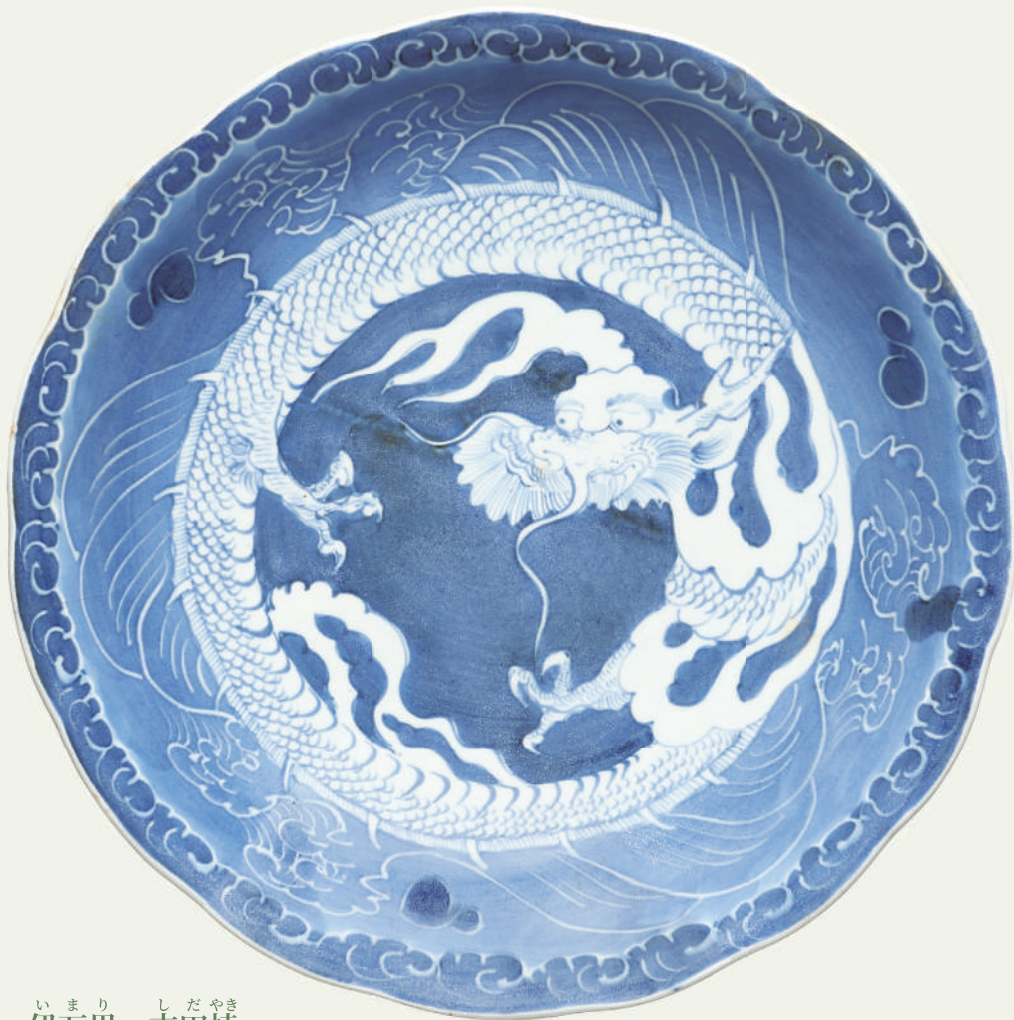


蟠龍（はんりょう）「力を蓄える」

動物



伊万里 志田焼
 江戸後期 尺皿

お寺や神社の障壁画には、色々な龍の絵が描かれております。そして、その龍の絵には、形や様子によって、それぞれの名前がございます。また江戸時代のお皿にも、同じように様々な龍が描かれており、人々は食事と共に、その龍の名前や意味を語り合い、楽しまれたようでございます。

仏教において、龍は仏法守護の八部衆の一つで、「龍神」と呼ばれております。そして、禅宗寺院などでは、「法堂の天井」に龍の図が描かれているのを、よく見かけます。「法堂」は、住職が「仏法を説く重要な建物」で、龍はそこを守っているとの事でございます。また龍が、「雲を呼び雨を降らす」とされる事から、「法の雨」（仏法の教え）を降らし、またその水気で、建物を「火災から守る」とい

う意味が込められております。

法堂の天井に描かれる龍は、主に雲の中にいる「雲龍」が多いのですが、京都の臨濟宗 相国寺の法堂の天井には、手を打つと龍の鳴き声に例えられる、特有の反響音がする事から、「鳴き龍」として知られる、狩野

光信筆（慶長十年・一六〇五年）の「蟠龍」が描かれております。

さて、「蟠龍」とは、「地上に蟠ってまだ天に昇らない龍」の事で、「蟠る」の意味は、「とぐろを巻いている」との事です。いつの日か、天に昇るために、日々、力を蓄え、準備をしている龍という訳でございます。そんな蟠龍の事を思い、このお皿を眺めていると、若き修行僧の方々が、法堂の蟠龍を仰ぎながら、高僧の説法のもと、日々、研鑽を積まれている姿が、目に浮んで参ります。

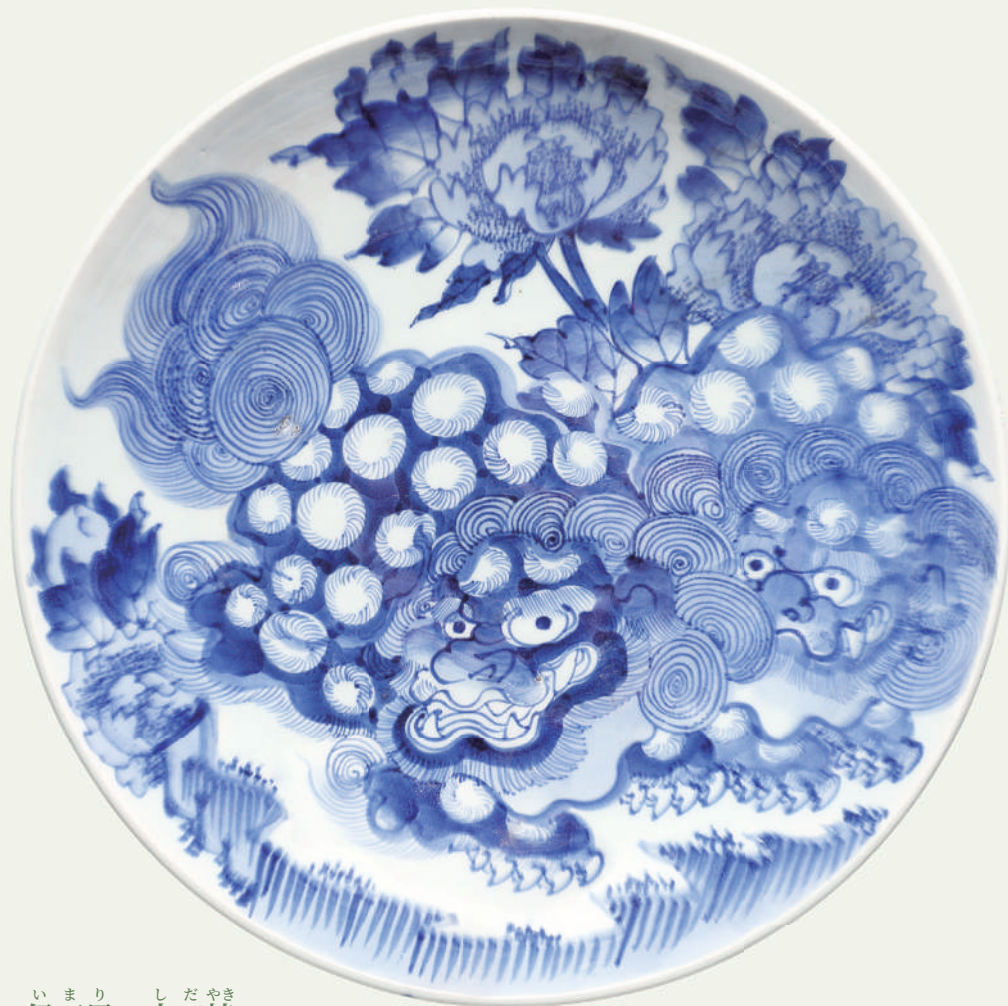
ところで、辞典では「蟠竜」と書かれておりますが、常用漢字表で龍の字は、竜の旧字とされています。そして絵手本では、「輪龍」や「龍之丸」などとも表現されております。やはり龍の絵においては、「龍」の字が、しっくりといったします。



「絵本初心柱立」
 （正徳五年・一七一五年）

踞地金毛の獅子

動物



伊万里 志田焼
江戸後期 一尺四寸皿

「踞地」とは、獣などが前肢を折って、「地面」に腹をつけて「踞る」ことでございます。

獅子は、今にも獲物に飛びかかろうとする時、目を爛々と輝かしながら、周りに注意を払い、満身に力をみなぎらせて、「大地に踞る」。その姿を、古人は「踞地金毛の獅子」と言い表わされました。これも、「橘守国」画伯の絵手本「絵本通宝志」（享保十四年・一七二九年刊）の内題（目次）に、「踞地」と書かれていたからこそ、辿りつく事が出来ました。

さて、禅宗での「喝」は、「励まし叱る時の叫び声」で、それもいくつかの型と働きがあるそうです。その一つに、「ある時の一喝は、踞地金毛の獅子の如く」と、禅の文献にござ

いました。この一喝は、「いかなる豪傑でも、肝をつぶす程すさまじい」といわれております。

お皿に描かれた獅子は、今にも飛びかからんとするような、鋭い眼光をしており、まさに「踞地金毛の獅子」でございます。そして二頭の獅子は、口を開けた「阿」の姿と、口

を閉じた「吽」の姿のものがおり、「阿吽」を表わしております。（18ページ参照）

さて、「北斎漫画」の十四編にも、「飛上獅子」と題して、前肢を折って、地面に腹をつけて踞る獅子の様子が、見事に描かれておりました。



葛飾北斎画
「北斎漫画 十四編」
（刊年未詳）

橘 守国画
「絵本通宝志」
（享保十四年・一七二九年）

桃持ち猿に月「猿は庚申の使わしめ」

動物



伊万里 志田焼
江戸後期 一尺一寸皿

この絵皿は、何やら三日月と桃を手にした猿が描かれております。それでは、その謎をゆっくりと、解いて参ります。

中国の道教によりますと、「人の体の中には、『三尸』という虫がいて、庚申（かのえさる）の日の夜になると、人が寝ている間に、体から抜け出して天に登り、天帝にその人の罪を告げ、それにより寿命が縮まってしまおう」とされています。

そして、その災いを防ぐための方法として、「庚申の日の夜は、徹夜をして、三尸の虫を体内に封じ込めば、天帝に告げられない」と説いています。

この庚申信仰は、平安時代に伝わり、江戸

下河辺拾水画

「群玉百人一首千歳宝」
（天保二年・一八三二年）



「絵本たから蔵」
（享保三年・一七一八年）

時代になりますと盛んになり、人々は「庚申講」という仲間を作り、「十干十二支」に基づいて、「六十日」ごとにやってくる庚申の日は、皆で揃って夜明かしをする、「庚申待」を行なったのでございませう。

そして、それぞれの講中（信者の集まり）は、記念として「庚申塔」を建てたりしたのですが、そこには、「申」の日に因んで「三猿」や「桃持ち猿」が彫られました。その「桃の実」は、古来、「邪気祓い」の力を持つとされて参りました。

このお皿には、桃持ち猿の頭の上に三日月が出ており、夜を表わしております。という訳で、このお皿は、「御申待」とも呼ばれた、庚申待の夜の集まりでは、鯛などを盛り、珍重されたこととございませう。その様子の絵が「群玉百人一首千歳宝」（天保二年・一八三二年刊）に載っております。

また、江戸中期に出された絵手本の、「絵本たから蔵」（享保三年・一七一八年刊）に、「猿は庚申の使わしめ」との一文があり、「使わしめ」とは「神仏の使」の意でございませう。

大黒ねずみ「大黒様の使わしめ」

動物

「白鼠」を辞書で調べてみたところ、「大黒天の使で、そのすむ家は繁昌すると伝えられ、大黒ねずみともいう」と記されておりました。

大黒様は、恵比寿様とともに民間信仰の福神として、古くより台所に祀られて参りました。そしてまた、次のような意味を込めて、仏教や神道でも崇められております。

「仏教」では、大黒天は「北方の神」とされており、その「北の方角」は、十二支の「子」に当たするため、鼠は「大黒天の神使」とされております。また、「神道」での「大國主命」の「大國」が、「だいこく」とも読めるため、習合し、その大國主命が「鼠に救われた」との神話から、こちらも鼠が神使と

伊万里 志田焼
江戸後期 尺皿



されております。そこで、特に白鼠は、「大黒様の使わしめ」として縁起が良いとされ、「大黒ねずみ」と呼び、賞でられたようございます。

さて、お皿の絵には、大根と白鼠が見えます。その大根は、二股大根として描かれる事も多く、これまた辞書には、「二股大根は、

福が来るとして、大黒天の供物にした」とあります。（「花・七福神の巻」186ページを参照下さい）という訳で、このような絵は、大黒様の姿は見えなくても、二股大根と白鼠を描き、暗に大黒様を匂わせる「判じ物」でもあります。

ところで、お皿の絵の白鼠は、大根を食べているようにも見えます。そこで、「大根食う」

を、「だいこく」の音に掛け、

洒落としても楽しめます

たようです。絵皿の

大根と大黒ねずみ

を見ていますと、

何やら福徳の神の

大黒様の笑顔が目

に浮かび、ほのぼの

として参ります。暗示は、

時として、心を和ませてくれます。



橘 守国画「絵本写宝袋」
(享保五年・一七二〇年)

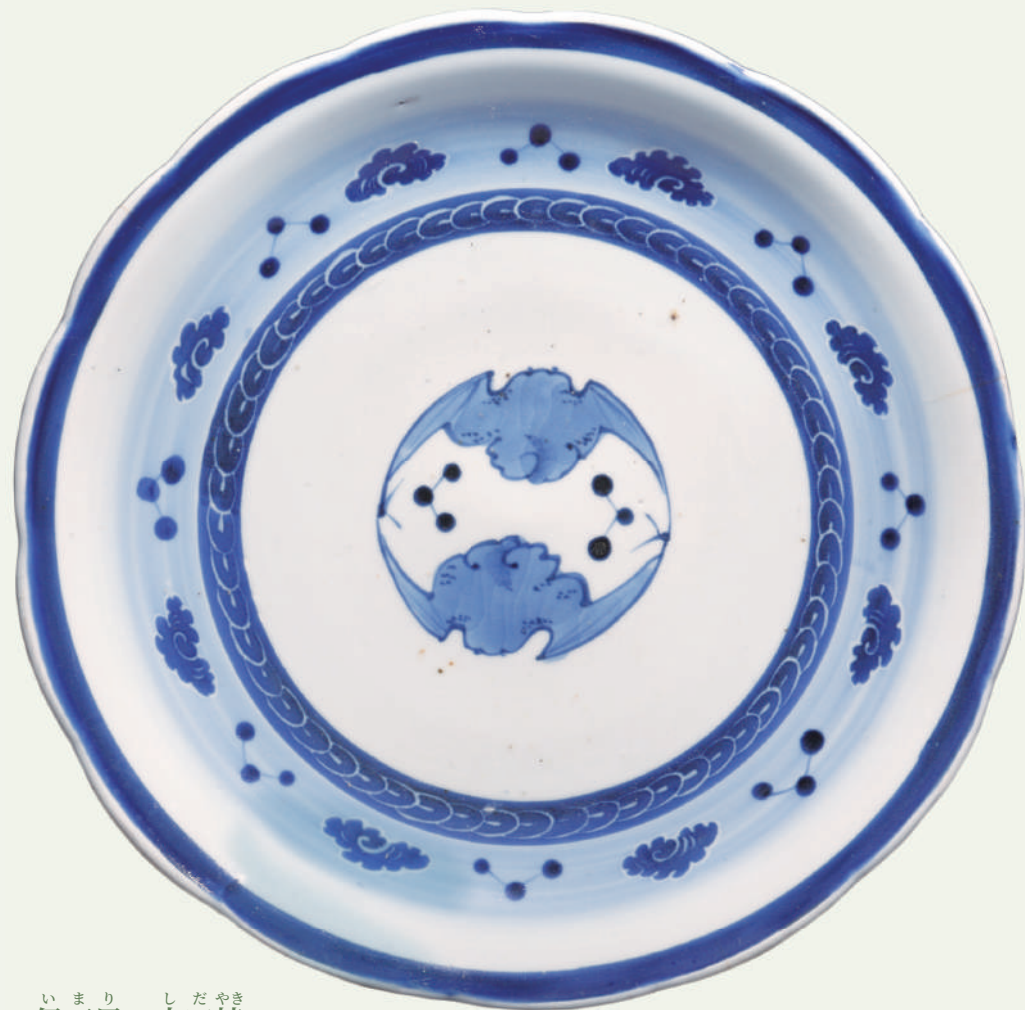
伊万里 志田焼
江戸後期 五寸皿



葛飾北斎画「北斎漫画 初編」
(文化十一年・一八一四年)
江戸時代に愛でられた白鼠と斑鼠

二匹の蝙蝠「双福・福は天よりの定め」

動物



伊万里 志田焼
江戸後期 尺皿

江戸時代の絵皿を、色々と調べてみると、その絵の題材や由来は、中国から学んだものが、基本になっている事が窺えます。これは、「漢字」にしても、法隆寺などの「寺院建築」、「都の造り方」まで、漢（中国）から学んだ訳ですから、当然の事と思われれます。日本は古くより、中国の文化圏だったという訳でございます。

このお皿には、見込みに二匹の蝙蝠と、何やら星らしきもの、それに雲とおぼしきものが描かれております。しかし、その図柄が何を意味するのか、当初は見当もつきませんでした。

さて、中国の書物によりますと、「蝙蝠」の音読みの「蝙蝠」は、その音が「遍く福が

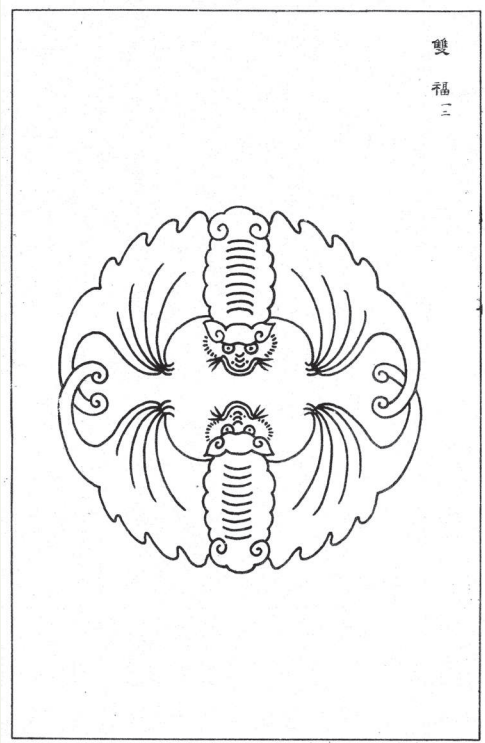
来る」という意の、「遍福」に通じるとして賞でられました。次に、線でつながった三つの星は、「星辰」といい、星や星座の象徴であり、そして雲は、めでたいしるしの、「瑞雲」でございます。

中国の教えでは、「福は天よりの定め、善の報い」と説かれ、「福は、天から降りる」とされております。

このお皿の「星と雲」は、「天」を意味し、そして、天から舞い降りてきた二匹の蝙蝠で、福が双んだ「双福」として、めでたさを表わしているでございます。

そして、「福は天よりの定め、善の報い」の意は、「人の欲は、天の道理の中であれ」という、「天理人欲」の教えと通じております。

雙福



「吉祥図案解題」

（昭和十五年・一九四〇年）



色絵 伊万里焼
江戸後期 七寸皿

橙に蜘蛛の巣と蝙蝠 「先祖代々」

動物



伊万里 志田焼
江戸後期 尺皿

このお皿には、天から福をもたらす蝙蝠と、待ち人來たる喜びを知らせんとして降りてくる蜘蛛の、その巣が描かれております、そして見込みには、橙色に色づく果実を放つておくと再び青色になり、翌冬、橙色になることから若返りと、何代もの果実が樹につくことから、「代々」に通じるとして賞でられる、「橙」が描かれております。

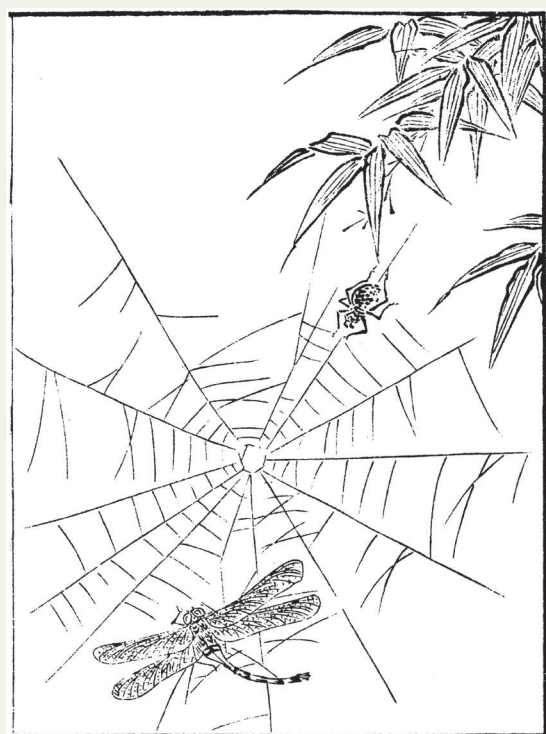
その「橙」は、「先祖代々」の営みが続いていく事への願いを込めて、今も、お正月には、めでたい物とされ、鏡餅の上などに飾られております。

さて、文化十三年（一八一六年）に出された「利運談」に、蜘蛛の事が次のように述べられておりました。

「蜘蛛といふ虫 夏になれば、家の軒端に網を作、其網に種々の虫をかけて、己が日々の食事とす。其中には 己が形よりも大なる、蟬、蜻蛉の類かかることあり。さやうの折は、其とんぼの尻尾の方より、己が貯る所の糸を出して、だんだんと巻あげて、其虫のよほりたる時、血を吸也。又其網、風雨に破らるれば、其度々に繕ひ置、まさかの時に、大利運を得んと、心がくる也」。

このように古人は、自然の生き物の姿や様子から、その心を学び、人生のお手本と、されてきたのでございましょう。

天がおつくりになった、生きとし生けるものの生き方は、それぞれ様々ですが、福や喜びが「代々永遠」に続くことを願われた、往時の方々の子孫への思いが、この一枚の絵皿から伝わって参ります。



長谷川雪旦二画「利運談」（文化十三年・一八一六年）
右：絵部分 左：解説部分

○蜘蛛といふ虫夏ふされ家の軒端小網を作其網は種々の虫をかくて己が食すとす其中より己が形よりも大なる蜻蛉の類かくるありたやこれ其とんぼの尻尾のより己が貯る所の糸を巻きてだんと巻あげて其虫のよほりたる時血を吸ふ又其網風雨に破らるれば其度々に繕ひ置ますこれ利運を得んと心がくる也

浦島太郎「蓬莱山から龍宮城」

日本人物



九谷焼
江戸後期～明治前期 八寸皿

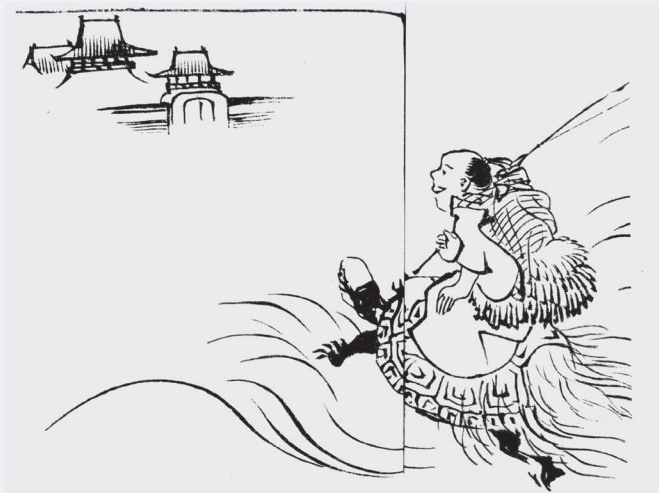
尋常小学唱歌の「浦島太郎」(明治四十四年・一九一一年発表)は、「昔々浦島は、助けた亀に連れられて、龍宮城に来てみれば、絵にも描けない美しさ」と、今でも歌われております。

ところが、江戸時代中期に出された、「絵本故事談」(正徳四年・一七二四年刊)には、亀はいじめられておらず、奈良時代の「丹後国風土記」に基づいて、次のように書かれておりました。

浦嶋子

雄略天皇三十二年秋七月、丹州余社の郡、管の人、水江の浦嶋が子といふ者、舟に乗て釣を垂る。遂に大なる亀を得たり。化して女となる。浦嶋が子、感じて夫婦となる。

山口素絢画
「倭人物画譜」
(文化元年・一八〇四年)



相伴て海に入、蓬莱山に至り、三百四十余年を歴て、淳和帝天長二年に帰る。別るに及で、婦、玉手箱を与へ、いましめていはく、『開ことなかれ』と。

浦嶋が子帰りて、未審くや有けん、箱を開ければ、中より煙たちのぼり、其時浦嶋が子、若き形を変じて、忽白髪の老翁となれり。世俗に、あけてくやしき玉手箱といふ、是なり。



葛飾北斎画「北斎漫画 初編」
(文化十一年・一八一四年)

ところが、江戸時代の享保(一七二六年)の頃から刊行された「御伽草子」では、「浦嶋子」が「浦島太郎」となり、行き先も「蓬莱山」ではなく、舟で「龍宮城」に行くと脚色されております。しかし、その龍宮城は、文中の描写によると、海中ではなく陸上にあったようでございます。

さらに、江戸後期になりますと、この話を様々に脚色した読本が次々と出され、「浦島太郎二度目の龍宮」(安永九年・一七八〇年刊)では、鯛や平目が登場し、太郎は舟ではなく亀に乗っております。

そして、明治二十九年(一八九六年)巖谷小波が、今も語られている「浦島太郎」(日本昔話十八編)を発表し、唱歌にもなったのでございます。そんな訳で、お皿の絵なども、陸上の龍宮城へ向かっております。

源氏物語「明石」

日本人物

ある日、何気なく江戸中期の「橘守国」
画伯が出された「絵本写宝袋」（享保五年・
一七二〇年刊）を見ておりましたら、このお皿
の絵に似たような図柄がございました。

それは、「源氏物語」第十三帖「明石」の
場面で、光源氏と従者が描かれたものでした。
お皿の絵とは、どこか似てはいるのですが、
左右の向きも違い、従者の数も違っておりま
す。しかし、何かしら「馬の顔の角度」や、
「手綱を引く口取の後姿」などが、模写され
ているように思えてなりませんでした。

そこで思いついたのが、このお皿の絵は手
描きではなく、「型紙摺絵」のため、左右が
逆の絵になったのではないか、との疑問でし
た。早速、絵手本に描かれている絵をコピー

それにしましても、明治の「絵型彫師」が、
百五十年以上も前の絵手本を大切にし、日々
学んでいた事に、「時の流れの穏やかさ」を
感じずにはいられませんでした。

さて、紫式部の創作された「源氏物語」は、
史実ではありませんが、その「明石」のあら
すじは、およそ次のようなものでございます。
「明石入道というお方は、近衛中将を辞
し、出家をされて明石に住んでおられました。
ところが、光源氏が都から身を退かれ、須磨
でわびしく過ごされている事を知り、源氏に
娘の『明石の上』を、嫁がそうと思われまし
た。そして、源氏をお迎えに、須磨へあがら
れました。そこで光源氏は、須磨から明石に
移られ、『明石の上』とお逢いになり、ほどな
くお二人は、恋をされるのでございます」。



伊万里 志田焼
型紙摺絵
明治前期 九寸皿

橘守国画「絵本写宝袋」
（享保五年・一七二〇年）

左右を反転



して、裏から透かして見たところ、「馬上の
光源氏」、「馬の顔や足」、そして「口取の男
の姿」は、絵手本そのものでございました。

米づくり「稲作の始まる日・種もみ」

日本人物



ひらどやき 平戸焼
江戸後期～明治前期 六寸皿

このお皿の絵の童は、弁当を片手に、亀を引き連れて、父親の後について歩んでおります。さて、この親子はどこへ行くのでしょうか。

私の幼き頃までは、まだ同じような風景が見られましたが、今はもう見る事もございません。この様子は、三月頃の春の季節です。父親は、稲の苗を作るために、まずは保存してあった種もみの俵を荷い、池へと向かいます。

そして池につくと、発芽を良くするために、種もみを俵のまま池水へ漬けます。それからおよそ二十日後に取り上げ、その後、「もみ」を日に干します。そしていよいよ苗代への種まきが始まります。

かについても、記しておられます。

和国耕作図

抑 此世に生来て、此米を食する人は、

農人にあらず共、此米をつくる様を、知らずんばあるべからず。しかばあれども田舎に住居せずしては、ことごとく、その生長収蔵の次第を見る事がたし。

かるがゆへに、これを絵に写して農人の力をもらひ、辛勞して生長し、みのる事を知て、貴人は民をあはれみたまひ、庶人は米穀を大切におもふべき、たよりともなるべし。

又、畿内にて早稲をつくる法は、まづたねを、せつぶんより二十日めに水にかし、二十日すぎでとり上、十日日にほし、手ひきがんの湯を、たわらのうへよりかけ、むしろこもなどおほひ、芽を出し、二月中のせつに至って苗代にまくなり。



橘守国画「絵本通宝志」
(享保十四年・一七二九年)

そんな訳で、絵皿の絵の意味は、「稲作の始まる日」の光景でございました。そして、そこに描かれている亀は、当時の童の愛玩動物という訳です。

それにしましても、これらの絵を見ながら思うのは、童等が、親達の働く姿を見て育ち、知らず知らずのうちに、仕事の術を身につけ、一生食べてゆける、「安心感のある人生」の素晴らしさです。

江戸中期に絵手本を多数出され、後に「画者の釈尊」とも呼ばれた橘守国画伯は、「絵本通宝志」(享保十四年・一七二九年刊)の中で、「和国耕作図」と題して、稲作の営みを丹念に描かれ、その説明と共に、なぜ、これらの絵を描かれたの

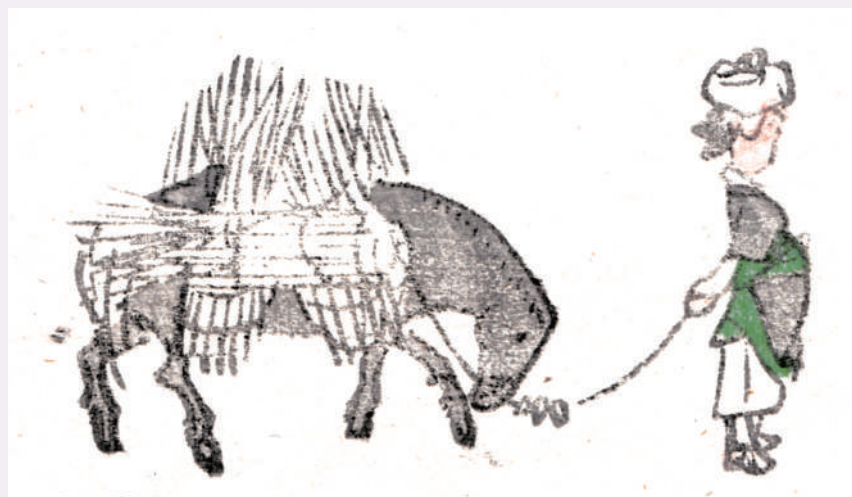


伊万里 志田焼
江戸後期 一尺一寸皿

「平清盛の娘」で、「高倉天皇の皇后」になられた「徳子（院号は建礼門院）」は、源平の合戦、壇ノ浦の戦いで入水されたのですが助けられ、帰京されてからは、「大原の寂光院」に隠棲されました。この時、共に従った阿波の内侍ら数人の女官は、生計の足しにと裏山で柴を集め、薪として京の街に売りに行かれました。そして、その時の、何かしら品のある装束を、里人がまねたのが、大原女の姿の元になったと、されております。

大原女の装束は、普段着ではなく、あくまでも商い用に装った身なりでございます。そして、生木を蒸し焼きにして乾かし、黒くなつた薪を売っていたため、「黒木売」とも呼ばれました。

河村文鳳画「文鳳簞画」
(寛政十二年・一八〇〇年)



牧墨僊画「写真学筆」
(文化十二年・一八一五年序)



黒木は、かまどの焚付けなどに使われ、炊飯器が出回る昭和三十年代までは、「黒木いりまへんかあ」と、柔らかな声が、京の街に聞こえてきたものでした。

頭から手拭をたらし道を行く、大原女の姿は清らかで、その仕草は、たおやかさに包まれておりました。また、格式を重んじ、決して押し売りはせず、そのなにかしらの品の良さが、都の大原女として人々に好まれ、江戸時代より描かれて参りました。

さて、このお皿とそっくりな絵が、「写真学筆」（文化十二年・一八一五年序）に載っており、絵師は、北斎門下の名古屋の尾張藩士、牧墨僊でございました。